

ペン俳句会 句会報(二二三号)

令和二年十月一日

新型コロナウイルスのため、前月に引き続き  
「メール句会」「オンライン句評会」を実施。  
兼題「案山子」「十」

宮原 ユリ

秋日和ひらりと通る改札機  
雨戸開け右半身に今朝の秋  
留守の戸にどつかと置かれ柿八つ  
女子会の十人十色秋うらら  
爺ちゃんのお下がりを着て案山子立つ

田中 水え

長雨にへの字を寄せる案山子かな  
山へ去る田の神送る案山子かな  
香氣満つ小さき十字の金木犀  
あと十回我肥ゆる秋スクワット  
天高し十返舎一九膝栗毛

大津 そうかい

気がつけば母の口ぐせ秋彼岸  
吐魯番(トルファン)の少女翡翠の葡萄食む  
星空に案山子来世の夢見るや  
来し方の十字路いくつちちろ鳴く  
かりがねや遊べる子らへ母の声

首藤 しずを

旅立ちの駅のざわめき菊日和  
黄金の穂波に溺れ瘦案山子  
秒針の音の粒立つ夜長かな  
鴟よ啼け去年の木立は伐られしか  
竹竿に十三夜月掛かりけり

中村 晃也

道端の露の墓標に切る十字  
父に似し後姿の案山子かな  
孤独とは人恋ふことよ夕紅葉  
刈り頃と案山子が呼んでいるやうな  
子の墓に話しかけ居り女郎花

内藤 まりこ

黒雲に龍を見たりし秋の空  
一両の列車見送る案山子どち  
九十九折り窓に紅葉の十重二十重  
彼岸花日にち違わず凜と咲き  
オレンジに染まる大きな秋の月

安藤 晃二

八ヶ岳の池を包みし蝉しぐれ  
十文字に原を抜け行く野分かな  
コナ禍やギンナンの輝り鈴生りに  
黄金田を睨む案山子の独り寂ぶ  
木漏れ日に朱の輝けり曼珠沙華

斉藤 まさお

爺さまと案山子の話す過疎の村  
十の字に過去ひとからげ秋日和  
閉店の貼り紙なぞる秋の蝶  
秋晴れや廂後ろに野球帽  
満月やのつと顔出す屋根の上

長尾 進一郎

雀来て案山子に遊ぶ昼下がり  
十字路の信号止まれ丸き月  
人絶へて日暮れの畦の案山子かな  
窓越しの虫の音を愛で長湯せり  
イヤホンをつけて転た寝秋日向

森田 元斐

谷戸の田に家伝の案山子今も立つ  
かかる雲離る雲あり十三夜  
名月や聞き覚えある靴の音  
籠り居へ訪ね来たりし今日の月  
湯気の立つおにぎり一つ野分去ぬ

新田 ゆふき

赤飯は母の好物田の案山子  
幸あれや十月十日の神無月  
戸隠の十割蕎麦の盛られ来る  
曼珠沙華慶きことありし日をたぐる  
明神の嶽の巖や秋下る

高橋 由紀子

秋夕焼け君住む街の給水塔

あねいもと十月桜数へ合ひ

ハイウェイへ案山子が案内田舎道

天盛りに紅葉ひとひら一人旅

乱れ萩庭に主なき車椅子

志村 良知

秋海棠母より逝きて十年（ととせ）なる

極上の天空富士は初冠雪

屋上の築庭に陽彼岸花

マスクして虚空を睨む案山子かな

一聲（いつせい）も空に虚しく法師蟬

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

吟行と俳句

「ぎんこうへいきましよう！」と俳句の先輩連中から声がかかる。初心者はず銀行を思い浮かべるほかない。返事を躊躇すると、「ぎんこうは大それだよと続く。それは：知っているけど…。「ぎんこうに行かないと俳句はできないよ」それは：よくわからない…でも、新米だから反論はできない…と言った経験は俳句を一から始めた大抵の人が持っている。私もわかりであった。吟行と文字にするとならるほど、俳句を作りに行くのかとようやく理解出来る。

さて、ペン俳句も一年に一、二回吟行を敢行している。十一月は原宿を出発して代々木オリンピックセンターまで吟行をすることにした。密にはならないので：てんでんに句帳を持って散策する…楽しみにしている。ペン俳句のメンバーは十分に吟行の楽しみを知っている人が多いが、楠本憲吉氏の吟行の説明の短文を引く

吟行には国語辞典が必要

俳句のハイキング、俳句の旅ともいえるのが吟行である。俳句の旅というのは、どんな小さなものであっても楽しく、句もまた楽しいものである。——中略——目に触れる材料を俳句にして、その場で句会を開きながら作品を発表していく楽しみは、格別なものがある（新編・俳句上達法より）

コロナウィルス感染対策を十分にしながら、楽しみましよう。